

レックリングハウゼン病の今回疫学調査と 前回調査の結果の比較

研究協力者 高 木 廣 文
文部省統計数理研究所
新 村 眞 人
東京慈恵会医科大学皮膚科
稲 葉 裕
順天堂大学医学部衛生学

レックリングハウゼン病の今回疫学調査と 前回調査の結果の比較

研究協力者 高 木 廣 文
文部省統計数理研究所
新 村 眞 人
東京慈恵会医科大学皮膚科
稲 葉 裕
順天堂大学医学部衛生学

は じ め に

本調査研究班と難病の疫学調査研究班事務局が昭和62年度に実施した全国疫学調査二次調査は、多数の病院・診療所の複数診療科を対象として実施されたため、必ずしも当該疾患の専門家が調査票に回答しておらず、そのため臨床症状項目などの未記入、不明などが極めて高率であった。このような調査項目に対する回答の偏りについて検討を加え、かつ臨床症状について信頼性の高いデータを得るために、本調査研究班の班員の所属する施設・診療科を対象とした疫学調査を、疫学調査分科会（分科会長、新村真人）を中心に実施した。ここでは、臨床症状項目を中心に、前回全国疫学調査結果と、今回の調査結果の類似点、相違点などを報告する。

資料について

昭和62年度に実施した全国疫学調査（二次調査）資料のうち、レックリングハウゼン病患者1588例の資料¹⁾と、本調査研究班の班員の所属する施設・診療科を対象に、平成元年4月～平成2年11月中に受診した294例の資料を用いて、比較を行った。調査項目のカテゴリが2つの調査で一致していない場合には、できるだけ前回調査に回答をあわせて比較した。

結果と考察

今回把握された294例は、男133例（45.2%）、女161例（54.8%）であり、前回の全国調査の男784例（49.4%）、女804例（50.6%）に比べ、女の割合が若干高くなっていた。表1にレックリングハウゼン病患者の調査時年齢を示した。20歳未満が大部分であり、この傾向は前回調査とかわりないが、調査時平均年齢は男22.5歳、女21.6歳、全体で22.0歳と、前回調査での男28.0歳、女27.8歳、全体で27.9歳と比べると、5.5～6.2歳ほど若い患者集団ということになる。この年齢差は、統計学的に有意であり、以下に述べる分析結果はこの年齢差による影響があるものと考えねばならない。表2には初診時年齢を示したが、これも同様に今回の方が、平均年齢でみて4.0～5.4歳ほど若くなっている。ただし、

表1 レックリングハウゼン病の性別調査時年齢

年齢 (%)	今回の調査			前回の調査		
	男**	女**	合計**	男	女	合計
0～	16.7	13.0	14.7	10.9	7.6	9.2
5～	10.6	11.2	10.9	10.9	11.6	11.3
10～	12.1	15.5	14.0	12.1	10.8	11.4
15～	10.6	14.3	12.6	11.5	10.8	11.1
20～	9.8	6.8	8.2	6.9	9.6	8.3
25～	6.8	9.9	8.5	6.3	8.4	7.3
30～	8.3	5.6	6.8	6.3	8.0	7.1
35～	6.1	8.7	7.5	7.5	8.4	8.0
40～	8.3	5.6	6.8	5.1	6.0	5.6
45～	3.0	3.7	3.4	4.9	4.4	4.6
50～	3.0	3.1	3.1	5.2	4.5	4.9
55～	0.8	1.2	1.0	5.0	3.5	4.2
60～	2.3	1.2	1.7	3.4	1.8	2.6
65～	0.8	0.0	0.3	1.4	1.9	1.6
70～	0.0	0.0	0.0	1.7	1.9	1.8
75～	0.8	0.0	0.3	1.0	0.9	1.0
人数	132	161	293	783	799	1582
平均値	22.5	21.6	22.0	28.0	27.8	27.9
標準偏差	17.1	15.4	16.2	19.9	18.6	19.2
不明	1	0	1	1	5	6

** p<0.01

表2 レックリングハウゼン病の性別初診時年齢

年齢 (%)	今回の調査			前回の調査		
	男	女**	合計**	男	女	合計
0～	24.0	21.4	22.6	20.7	17.6	19.1
5～	9.3	15.1	12.5	10.5	9.4	9.9
10～	8.5	10.7	9.7	10.5	10.1	10.3
15～	13.2	8.8	10.8	7.1	10.1	8.6
20～	8.5	8.2	8.3	6.7	9.4	8.0
25～	5.4	10.1	8.0	7.1	7.7	7.4
30～	8.5	4.4	6.3	7.5	7.4	7.4
35～	4.7	8.8	6.9	5.9	7.7	6.8
40～	7.8	3.8	5.6	5.2	5.3	5.3
45～	3.9	4.4	4.2	5.5	5.3	5.4
50～	2.3	3.8	3.1	3.7	2.7	3.2
55～	0.0	0.0	0.0	4.5	2.1	3.3
60～	3.1	0.6	1.7	1.8	1.8	1.8
65～	0.0	0.0	0.0	1.7	2.2	2.0
70～	0.0	0.0	0.0	0.8	0.8	0.8
75～	0.8	0.0	0.3	0.7	0.4	0.5
80～	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1
人数	129	159	288	762	769	1531
平均値	20.6	19.1	19.8	24.6	24.5	24.5
標準偏差	17.3	15.5	16.4	19.9	18.6	19.3
不明	4	2	6	22	35	57

** p<0.01

男についてその年齢差に有意差は認められなかった。

表3に主要な項目についての前回調査と今回調査の統計学的検定結果を示した。「診断」で男以外は有意差が見られたが、これは「疑い」例が今回は減り（前回6.8%，今回2.1%）、「小児で色素斑」例が増えたことによる（前回14.2%，今回21.1%）。レックリングハウゼン病の家族歴「有」の割合は今回37.0%であり，前回48.1%に比べ減少している。結婚歴も未婚者が82.0%であり，前回の74.1%に比べ，婚姻率が減少している。これは，対象者の年齢が前回よりも約6歳も若いことによる影響と考えられる。

主要臨床症状で有意差が認められたものは，男女とも13項目中4項目であった。男女ともに有意差が認められた項目は，「虹彩小結節」，「神経症状・痙攣」，「知能低下」の3項目であった。

虹彩小結節「あり」の割合は，前回男20.0%，女23.8%であったが，今回は男45.5%，女50.0%と高率となっていた。神経症状・痙攣は前回調査では神経症状の有無のみ回答してもらったものであるが，「あり」が男18.6%，女17.7%と今回の男8.1%，女5.3%に比べ高率であった。知能低下も同様に，前回では「あり」が男15.6%，女10.6%と，今回調査での男5.7%，女4.0%に比べ高率であった。

表3 主要項目の今回調査と前回調査の回答の差について

調査項目	男	女	全体
初診時年齢	—	**	**
診査時年齢	**	**	**
診断	—	**	**
家族歴	**	—	**
結婚歴	*	—	**
[臨床症状]			
1 カフェ・オ・レ斑(15mm 以上)	**	—	**
2 小レックリングハウゼン斑	—	—	**
3 皮膚の神経線維腫	—	—	—
4 びまん性神経線維腫	—	—	—
5 末梢神経の神経線維腫	—	—	—
6 脊柱・胸郭の変形	—	—	—
7 脊髄腫瘍	—	—	—
8 脳腫瘍	—	**	**
9 虹彩小結節	**	**	**
10 悪性神経鞘腫	—	—	*
11 神経症状, 痙攣	**	**	**
12 知能低下	**	*	**
13 その他の症候, 合併症	—	—	—
[検査結果]			
1 脳腫瘍	—	*	**
2 脊髄腫瘍	—	—	—
3 脳波, 基礎波	*	—	—
4 眼底病変	*	—	*
[経過(最近1年間)]			
1 受療状況	*	**	**
2 日常生活	**	*	**
3 予後	—	—	—

—: 有意差なし, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

「カフェ・オ・レ斑」については、男で有意差が認められた。これは、今回調査では、「なし」が3.8%、「10個以下」が41.2%であったのに比べ、前回ではそれぞれ9.0%、27.3%と大差があったためである。女では「脳腫瘍」で有意差が認められた。これは、前回調査で脳腫瘍ありとした割合が女で12.8%あったものが、今回4.2%まで減じたためである。実際には、男でも11.8%から6.0%に減少しているが、統計学的な有意差は認められなかった。今回の調査には脳（神経）外科が対象となっていないためであろう。他の臨床症状項目については、やや異なる回答パターンがみられても、統計学的な有意差は認められなかった。

主要検査結果については、男では「脳波, 基礎波」と「眼底病変」で回答に有意差が認められた。これは、前回では男で異常が31.5%、境界型が17.0%もいたのに比べ、今回はそれぞれ15.4%、7.7%

と半減したためである。これは前述のように、脳外科受診者を対象としていないためと考えられる。眼底病変については、64.4%が検査していないが、検査をした場合には、異常ありが男で18.6%、女で15.6%となり、前回調査の割合8.2%、9.3%に比べ高率であった。男のみで有意差が認められたが、女でも差があるようにみえる。女では、脳腫瘍に有意差が認められているが、これは臨床症状の場合と同様に、脳腫瘍ありの割合が半減しているためである。

経過に関しては、「受療状況」と「日常生活」が男女ともに有意差が認められた。受療状況に関しては、入院が全体で7.8%であったものが今回は3.8%と少なく、通院が前回は61.4%であったのが77.2%になるなど、調査対象の年齢の相違が現れた結果と考えられる。日常生活の状況も同様であり、今回の対象者が若い分だけ活動性が高いという結果を示したものと考えてよいだろう。予後に関しては、有意差が認められていないが、これはレックリングハウゼン病では急激な変化が稀なためと考えられよう。

ま と め

昭和62年度に実施した全国疫学調査（二次調査）と、今回実施した本調査研究班班員が所属する病院・診療科を中心とした疫学調査のうち、レックリングハウゼン病に関して、同一の調査項目について回答の比較を行った。対象者の年齢が平均約6歳程今回の調査で若かったため、受療状況、日常生活などでは有意差が認められた。しかし、主要な基本的な臨床症状では大差なかった。ただし、脳腫瘍などのようにある診療科が調査対象にならなかったことの影響で、回答パターンが大きく影響されるものもあった。

調査方法が大きく異なっているが、方法の違いというよりも、調査対象者の年齢構成の差の影響が強いようであり、重篤な症状については対象診療科の違いにより、その頻度に相違が現れるものと示唆された。

文 献

- 1) 新村真人，他：レックリングハウゼン病の全国調査(二次調査)，厚生省特定疾患神経皮膚症候群調査研究班昭和63年度研究報告書，5-6，1989